

## 第十六章 京都 — 屋島の戦い

志乃が、あわただしく郷子の部屋に入ってくると言った。

「判官さまと景時殿が大喧嘩して、あわや切りあいになるところだったそうですよ」

「ええ、またそれはどうして」

「渡辺ノ浦というところで船が完成するのを待っていた判官さまのところに景時殿がやっ  
と追いつき、主要な武将が集まって作戦会議を開いたのだそうです。その会議の席上で、  
軍目付の景時殿が『わしは、百四十艘の船を用意した。義経殿は、五艘の船を準備したら  
しいが、全ての軍兵を乗せるには船がまだ不足している。全ての準備が整い、さらに義経  
殿が味方に引き入れたという話が嘘でなければ熊野水軍が応援にかけつけるだろうから、  
それを待って、出陣しよう。しかも、いまは荒天が続いて海が酷く荒れている。こんな時  
期に出航したら、戦をする前に船が転覆して無用な損失を被る事になる。準備が整い天気  
が回復してから出陣すべきである』と強く主張したそうです。

これに対して、判官さまは、次のように答えたそうです。

『こちらが全ての準備を整え、熊野水軍が加わっても、二千数百騎にすぎない。

それが、好天の日に粛々と船を屋島に進めたら、迎え撃つ平家の一万二千騎にとっては思  
う壺だ。しかも、平家の水軍は海上戦が得意ときている。それに対して熊野水軍は別とし  
て、本隊のわが坂東武者は、騎馬戦は得意だが、海上戦はほとんど経験がない。まともに  
戦えば、勝てるわけがない』

ここから景時殿と判官さまといい争いになったそうです。

『それは、知恵がないからじゃ。われわれの船すべてに逆櫓をつけよう』

『逆櫓とはなんだ』

『ははは、逆櫓もご存じないとは、恐れ入った將軍さまだ。そもそも櫓というのは、船を漕  
ぐための道具でござる。船を前に進めるために通常後ろについている。この程度のことは、  
五歳の童子でも知っているが、逆櫓というのは、船の前につける櫓のことをいう。これに  
よって、船を前に進めたり、後に進めたりして、坂東武者が騎馬で闘うのと同じように海  
上で闘う事ができるのよ。

それにわれわれの出陣は、本隊の範頼軍を支援する搦手が目的なのだから、なにも平家に  
壊滅的な打撃を与える必要はなく、その支援目的が果たせれば十分なのだ』

『つまり、闘う前に逃げる準備をしておく事だな。そんな弱気な事では戦に勝てるはずが  
ない。戦というものは、将たる者が絶対に勝つという信念を持って部下を鼓舞し、部下も  
それを信じて必死になって攻め続けてやっとならば勝てるのである。逃げる準備をして闘えば、  
部下はすこしでも形勢が不利になれば、いくら将が退くなと叱咤しても逃げ腰になる。こ  
れでは、戦に勝てるはずがない。俺の船には、逆櫓はつけない。命が惜しいならば、お前  
の船にだけ逆櫓をつけよう』

『優れた将というものは、戦陣の後方に位置し、戦局全般を鳥瞰して時々刻々変化する戦

の情勢に合わせて、攻めるときは攻め、退く時は退く、そして最終的に勝ちを収めるように導くものだ。それを、軍兵の数の差も考えずに自ら先陣を勤め前後左右の情勢も見定めず、ただひたすら前に突進していくのは無謀な猪武者と同じで、優れた将とは言えぬ。大将が最初に戦死してしまったら、指揮を取るものがいなくなり軍は混乱して烏合の衆になりはてて敗走することは目に見えているではないか』

『俺を猪武者とぬかしたな』

二人が、あわや抜刀しそうだったので、周りのものがあわてて止めたとかいうことでした。

そして、景時殿は

『あのように馬鹿な將軍には、会ったことがない』と怒り狂っていたとか

「それで、義経はどうしたのですか」

「なんと、その夜のうちに暴風雨の中、いやがる船頭を刀で脅して、五艘の船に百五十騎を乗せて、出航してしまったのだそうです」

「だれから聞いたのですか」

「須美殿が話してくれました。恐らく、郷姫にもそれとなく伝えたかったのではないかと思いますよ」

郷子は、天を仰いだ。

(景時との喧嘩といい、わずかな軍兵を率いた暴風雨の中の出航といい、義経のやることは理解しがたい。まるで自殺行為ではないか。須美は景時の指示でこれを鎌倉に報告するのだろう。ただ、わたしは義経が、いままで戦の常識と考えられていた定型的な戦略に拘束されることなく自由な発想の下に作戦をたて実行に移しているのだと思いたい。それはもう既に鶴越で実証されているではないか。わたしは稀代の戦略家といわれる義経の天才を信じるわ)

郷子と志乃が清水寺の参詣から帰ると、静御前が待っていた。

静は、義経が出陣した後は、堀河館で酒宴が開かれる事もなく、六条室町の館にこもって顔を見せることもなかったもので、郷子は驚いた。

(何の用事だろうか)

郷子と静は、酒宴が開かれていた広い部屋に二人だけで向き合って座った。

「お久しぶりでございます」

静が丁寧に挨拶する。

「……………」

郷子も目礼で挨拶を返すが、何と答えたらいいか判らなかった。

酒宴など大勢の人がいるところでは、何度も話したことがあるが、二人きり差し向かいで話すのは今日が初めてだった。どうしても緊張して多少ぎこちなくならざるを得ない。

「ご懐妊おめでとうございます」

「それをどうして」

「判官さまにお聞きしました。『俺もとうとう子供の親になった』と大層お喜びのご様子でした」

「そうですか」

(わたしには、出発前に『ややのために自愛せよ』と言っただけだった)

どうしても、返事がそっけなくなった。

「あまりに早いので驚きましたわ」

(どういう意味なのだろうか。義経の種ではないかもしれないという疑問が含まれているのだろうか)

静がそれを察して素早く反応して言った。

「ごめんなさい。変な意味ではないのです。判官さまが、『あの嫁は、確かに俺がはじめての男だった』と言われてましたもの」

「まあ、あなたにそんなことまで」

郷子は、腹が立ったが、一方では、早すぎる妊娠について、義経がそういっていることに安心した。

「ここに来て、お祝いを言うべきか悩みましたが、知らぬ振りをするのも心がひけたものですから、今日思い立ってご挨拶にまいりました。母の磯禪師から『白拍子というのは、所詮は芸人なのだから側室でもなく妾として分をわきまえていなければいけない。妓王の例もあるでしょう』といつも言われていましたから。

「妓王というのは、清盛の妾だった白拍子のことでしょうか」

「妓王のことをご存知でしたか」

「清盛が、あまりに見事な舞をまうので妓王に家を与え、母と妹と一緒に住まわせて妾として何不自由ない生活をさせていたのに、可憐な仏御前という白拍子が現われると、とたんに妓王と母と妹を家から追い出し、仏御前に住ませたとかいう話なら聞いたことがあります」

「二人の、その後の話を聞かれたことがありますか」

「いいえ」

「清盛は、仏御前に元気がないので気晴らしのために、落ちぶれた妓王を無理に呼び出し、仏御前の前で今様を歌わせ舞をまわせました。あまりの悲しさに妓王は髪を切り尼となって、嵯峨野の庵でこれも尼となった母と妹と一緒に毎日念仏を唱えて暮らしているのだとか」

「清盛は、なんという酷い男なのでしょう」

「その後、突然尼になった仏御前が庵を訪ねて来たので、いまは四人で一緒に念仏を唱えながら暮らしているとの事です。母は、このように、白拍子の運命など儚く悲しいものなのだから心しておきなさいと言っているのです」

「義経は、あなたが良くご存知のように清盛のような卑劣漢とは違って、義理堅くて優し

い男ではないでしょうか」

静は、郷子が義経と呼び捨てにしたことに、微妙な反応を示したが、それをはっきり表に出す事はなかった。

「わたしも判官さまを信じていますが、母はこうも申しておりました。

『正室に先に子供が出来てよかった。もしこれが反対だったら、正室に仲良くしてはいただけないだろうと』

（静は、自分は白拍子の妾にすぎないと認めたくなくて、正室であるわたしと仲良くしていきたいといっているのだろうか。磯禪師と静御前は、並ぶものない一流の白拍子として世間に認知されている。だから、誰の庇護なども受けずに十分に独り立ちして生活していけるはずだ。それを、このように自分を卑下してまでも義経との関係を保ちたいとするのは、静が心から義経を愛しているからに違いない)

「あなたはお幾つなのですか」

「十七歳でございます」

「まあ、わたしと同じ年だわ。年上だと思っていましたのに」

「このような仕事をしていますと、どうしても実際の年よりも老けて見られてしまいます」

「義経とは、どのようにして知り合ったのですか」

「ちょうど判官さまが、鶴越の奇襲で平家を破り、戦の英雄として都に凱旋して、大評判になっている時でした。戦勝を祝う祝宴がここで開かれたのですが、その席にわたしも呼ばれました。わたしも、今評判の英雄と会えるのを楽しみにしておりました。わたしが一曲舞い終わると、判官さまがわたくしを自分の席にお呼びになり『美しい舞をもうあなたに一目で惚れてしまうた』といわれたので、わたしもすっかり嬉しくなり『あなたのような若くて美しい方が戦の英雄などとは、とても信じられませんわ』と申し上げると『きょうは、酒宴の終わるまでここに残っていてくれ』と言われ、そのままずっとここに……」  
(わたしが婚約する前の話だから嫉妬するのは止めよう) と郷子は心に決めた。

「あなたがたの噂は、河越まで伝わってきましたよ。それで、比企尼を通じて義経の正室にと話があったときには、お断りしようと思ったのですが、頼朝さまのご命令ということで、お断り出来ませんでした」

「いいえ、わたくしは、どうせ正室にはなれない身でございますから。あなたのような方が正室になっていただき、ほっとしているのです」

「本当は、義経の現況が知りたくていらしたのではないですか」

「お判りになりましたか。いまどのようなことに？」

「暴風雨の中を、わずか五艘の船に百五十騎を乗せて出航したということです。わたしは、義経の無事を祈って毎日清水寺に参詣しています」

「わたしは、毎日安全を祈願する舞をまっています」

「出陣の時、義経になにか札のようなものを渡そうとしていましたね。義経は、その受け取りを拒んでいたようでしたが」

「見られてしまいましたか。実は、近くのお寺からお守りを頂いて、渡そうとしたのですが『俺は鞍馬寺で修行した身だが、平家の滅亡と源氏の再興は祈願したが、自分の身の安全は祈った事がない。また、浄土に往かれるとも思っていない。だから、お守りは不要だ』とってどうしても受け取られませんでした。自分の身を案じていたり、地獄行きを恐れていたら戦に勝てないと思われているのでしょう」

「わたしたち二人で義経のために精一杯お祈りいたしましょう」

郷子は、静の手を取ってしっかり握ると、目でうなずきあった。

(この人とは、うまくやっていけそうだわ) 郷子は、思った。

郷子は、最近、あれほど悩まされたつわりもなくなり、食事がおいしくていくらでも食べられる。体も太ってきたのがわかる。手を下腹に当ててみると幾分か膨らんでいるような気がする。そんな折、留守居役の重平から、吉報がもたらされた。鎌倉に向かう使者が堀河館に立ち寄って教えてくれたのだという。

それによると、暴風雨の中、丑の刻（午前二時）に出航した五艘の船は、通常なら三日はかかる行程を、わずか四時間で航行し卯の刻（午前六時）には阿波国の勝浦に着いたという。義経は、船酔いで弱っている軍兵を叱咤激励し、直ちに河越黒に跨ると、屋島に向けて進軍を開始した。勝浦から屋島までは、普通二日の道のりであるというが、それを一日で走破し、翌朝の辰の刻（午前八時）には、もう屋島を目前とした志度に着いていた。屋島は島と呼ばれていても、ほとんど陸地で本土と繋がっている。

間諜からの報告によると、平家は源氏の上陸に備えて、讃岐と阿波の海岸線一帯に幅広く守備兵を置いているため、屋島の本営には、わずか千騎程の軍兵しかいないという。

義経は、まず、屋島の対岸の村の家々に火をかけさせた。軍兵を多めに見せるためである。黒煙がもうもうと立ち昇ると明け方まだ目覚めていない平家の面々は、源氏の奇襲と知って、大混乱に陥り、とるものも取り敢えずに、船に乗って沖に逃れたという。義経軍がわずか百五十騎とは思わなかったのである。梶原景時が率いる百四十艘の船が屋島に到着したのは、その二日後である。熊野水軍なども加わったため、平家は、戦を諦めて本隊のいる壇ノ浦に向けて落ちていったという。

義経は、鴨越の逆落としの奇襲作戦と同様に、今回も奇襲作戦が成功したのだった。

重平は、最後に「判官さまが、九死に一生を得たのでございますよ」といって、使者から聞いた次のような話をした。

義経は、華やかな鎧兜を身に纏い、黄金造りの太刀を突き、漆黒の逞しい馬に乗って先頭をかけるので、一目で大将と判ってしまう。それで、平家の船から矢が集中的に射掛られる。ほとんどの矢は届かないが、中には強弓をひくものがいて、その一本が真っ直ぐに延びてきて義経を射そうになった。その瞬間に、義経の前に奥州の藤原秀衡がつけてくれた佐藤継信が立ちふさがった。

矢は、継信の首を射抜き、そのまま落馬すると即死した。

義経は、その遺骸を抱えて退却すると、号泣しながら遺体に取りすがって許しをこいた後、奥の千本松原のあたりに葬った。そして、近くの寺から僧侶を探し出して連れてくると、河越黒を寄進して、成仏を祈らせたという。

郷子は、奇襲作戦が成功したことよりは、義経が無事だった事が嬉しかった。

(やはり、清水寺の観音菩薩に祈願してよかった。ただ、これからは、佐藤継信殿に感謝の祈りも捧げよう)

郷子は、重平に頼んで、この内容を静にも伝えてもらった。

郷子と一緒に重平の話聞いた志乃が、須美から次のような話を聞いたという。

梶原景時が、屋島に百四十艘の船を進めたときには、義経と平家との戦いは既に終わっていて、平家の船が瀬戸内を西に向けて逃げるところだった。鴨越の奇襲に引き続き、今回も義経に出し抜かれたので、景時はまたも軍目付が虚仮にされたと怒り狂っている。そして、義経が、波打ち際で平家に対して「某は、一の院（法皇）の宣旨を受けて平家討伐にまいった五位の大夫尉、檢非違使の源判官義経である」と名乗った事を聞いて、それを問題にしているらしい。

景時の主張では、「義経は本来頼朝公の代官であって、義経が平家の追討に当たっているのは、頼朝公のご命令によるものである。すなわち鎌倉政権の棟梁である頼朝公が法皇の宣旨を受けて、義経に命令を発したものである。

それをないがしろにして、法皇じきじきの配下であるかのごとき名乗りを上げたのは、鎌倉政権としては許しがたき暴挙である」ということになる。

(景時という人は、義経のあら捜しをするだけで、なぜ平家に勝った事を素直に喜べないのだろう。頼朝さまが、義経を正当に評価しないのは、この男のせいなのだ)と郷子は思う。